博士（人間科学）学位論文　概要書

介護者の困難と介護の継続について

Difficulties and continuation in care-giving

2006 年 7 月

早稲田大学大学院　人間科学研究科

川野健治

本研究は高齢者の介護者の困難と介護の継続について、現象論的アプローチから検討したものである。

第一章では介護の負担をめぐる議論を整理した。その上で、本研究では介護のストレスや価値といった介護行為の「外側の視点」ではなく、介護行為の継続自体を扱うことにした。なぜなら、介護は負担だからやめる／楽だから続ける、といった枠組みではなく、むしろ困難を抱えつつも、継続される行為として提示されるべきと考えるためである。

そのようなモデルで介護を捉えるために、第二章では理論的立場と方法論を整備した。まず郡司（2002）の議論を参考に、理論的立場として「現象論的アプローチ」を導入し、トークン的語り、トークン的介助行動へ注目するという方法を採用した。それは可能項、必然項、現実項という概念を用いることで、モデル全体の弱さ、つまり二項の関係が第三項によって媒介され、時にはその関係性が覆ってしまうような特徴を持ったモデルを採用し、現象を不安定な・動的なものとして捉えるものである。さらに重要なことは、トークン的な語り、行動をデータ化するという本研究の手続きが、

（1）介護者にとっての困難を、

（2）介護者が自らの行為の中で問題化し対応するとき、

（3）研究者はそこで初めてそれが困難であるとしてデータとする、

という仕組みにつながったことである。これにより、研究者が介護者の外部から「問題」を提示して答えを「獲る」、そのような侵入的な調査を避けて、「介護者が介護を問題化しつつ続ける」という視点からの介護の諸領域の困難を整理することができると考えた。

第三章では、家庭介護者自身による、困難を抱えた介護の意味づけを捉えようとした。関東地方北部の伝統的城下町で数年にわたって行ったフィールドワークによるデータのうち、家庭介護者の語りをとりあげ、現象論的アプローチを背景としたナラティブアナリシスを行った。その結果、食事、歩行・入浴、排泄、認知症といった介護領域の特徴が媒介して、介護者自らが問題化し、意味づけが行われていたことが見出され、一つ模式図にまとめられた。

その中で、特に注目したのが応答性の問題である。それは自らの介護行為に対しての被介護者の応答を待つ（期待して待つ、応えがなければ不安定になる）という傾向のことであり、食事介助や排泄介助といった「やりとりのある介助領域」で、被介護者が認知症などによって意思疎通が困難であるときに見出された。調査協力者のうち、A さんと B さんは、ともに夫の介護に熱心に取り組み、おそらくそれゆえに、抜き差しならない応答性を抱えて介護を続けていた。それは両者の心身に実際に影響を与えていた。この「応答性の隘路」について、解決をさぐるべきであると考えられた。

第四章では、この問題からの抜け道を、特別養護老人ホーム（以後、特養）のケア職員の実際の食事介護行動のなかに見出そうとした。認知症のある利用者への食事介助を取りあげることで、家庭介護者と同様に応答性の問題に直面しつつも、ケア職員としての経験、あるいは特養の組織特性など家庭介護者にないリソースが、問題解決への手がかりになる様子を捉えられると考えた。

そこで、ある特養でのフィールドワークによるデータのうち、食事の全介助をうけている 2 人の

利用者に対する、6 人のケア職員の食事介助シーンを撮影したビデオを、現象論的アプローチを理論的背景とした手続きを用いて分析した。その結果、いわば行為レベルでの応答性問題が観察された一方、そのような問題に陥らないような、やりとりも見出された。そのポイントは、被介護者の発信する情報をその意思表示とみなして正確に読み取ることから、その情報発信の中に価値ある部分を（介護者が）見出し、そこに焦点化して声を重ねて、豊かにしたり方向づけたりする、そのような働きかけることへのスタンスの変更である。

第 5 章で議論したのは、そのようなスタンスの移行を家庭介護者はいかに得られるのかということである。

まず、異なるフィールド、すなわち家庭介護の語り研究と施設介護のビデオ分析の結果を重ね合わせる意義について、本研究が、いわゆる仮説検証型＝量的研究の枠組みによる理論展開を採用せず、転用可能性の評価に取り組むことから論じた。その上で、被介護者の反応の中に正解を探そうとする介護から、被介護者の反応に合わせて展開を作ろうとする介護、つまり第四章で「合奏のように食事介助する」あるいは revoicing といった表現で説明された状態への移行への手立てが検討され、４つの方向性が提案された。

これらは決して、個々の介護者を個別に支援していくことでは達成されない。個別の介護を充実させるために、地域での介護者同士の交感を活性化させる。それが、応答性の隘路から抜け出し、介護を豊かに続けていくための手立てではないかと考察された。